

AI時代の死生観

—一人々の年代や人生経験を考慮する必要性の考察—

○庄司昌彦 (Masahiko SHOJI)

Keywords : 技術と社会の関わり、死生観、AI時代、データ活用、アンケート調査

1 目的

本研究は、技術と社会の関わりについて特に「死生観」に注目して行ったアンケート調査結果の分析・考察によって、日本国内における現在の人々の意識の一端を明らかにすることを目的としている。本研究を通じて、AI（人工知能）に代表される情報通信技術の研究開発とその社会実装の間で生じてきている倫理的・法的・社会的課題（ELSI: Ethical, Legal and Social Issues）に関する議論の進展に貢献することを目指したい。

2 方法

本研究の母体である調査研究プロジェクト「HITE-Media」では、2021年度に『RE-END 死から問うテクノロジーと社会』という書籍を出版し、『END 展 死×テクノロジー×未来=?』という展覧会を開催した。本研究で分析するアンケート調査は、この書籍出版と展覧会に合わせて2021年6月25日から7月10日まで、調査会社のモニター1,000名に対しオンラインで行ったものである。質問の設定、分析・考察にはHITE-Mediaプロジェクトメンバーとの議論も反映されている。

3 結果

「何歳まで生きたいか」という問いに対し97.6%の人々は、現在の平均と大きく変わらない101歳以下の年齢を挙げた。また「AIによる余命の予測」については、年齢の上昇とともに「見たくない」という回答が増加した。

また、「ライフログデータをオープンデータとして残す」ことへの意向は年代が上がるほど「どちらともいえない」が減少し二極化する傾向が見られた。「死者とのVR上での再会」についても年代上昇にともなって二極化する傾向が見られた。

4 結論

本研究は単純集計と簡単な分析に基づく考察を行ったレベルであるが、死生観について「自分自身に関すること」では、年齢上昇とともに技術を頼りたがらない傾向が高まる可能性が示唆された。また、死者とのVR上での再会など「自分以外の人々との関わり」については、年齢上昇とともに人々の考え方が二極化する傾向が見られた。これらの結果から、AI等の情報通信技術の社会実装においては、少なくとも「年代や人生経験に応じた立場の違いが存在する」ことを前提として政策検討やマーケティングを行う必要があるのではないかと考えられる。

【主要参考文献】

塚田有那, 高橋ミレイ, HITE-Media (編) (2021) 『RE-END 死から問うテクノロジーと社会』, ビー・エヌ・エヌ.